

変容するナフダトゥル・ウラマーの二重指導体制

——ウラマーの権威と指導力の乖離——

こ ばやし やす こ
小 林 寧 子

《要 約》

インドネシア最大の宗教社会団体、ナフダトゥル・ウラマー（NU）は、ウラマーを中核とし、その影響下にある一般信徒（ウマツト）が人的につながって構成されている。この構成員の二重構造に対応して、中央指導部は、碩学のウラマーを戴く最高指導部のシュリアと、組織運営の実働体タンフィズィアから構成される二重指導体制である。政治に深く関与して組織拡大するなかでタンフィズィアの機能が大きくなったが、ウラマーが指導することを謳った組織の基本方針（ヒッタ）が形成され、シュリアの復権が目指された。しかし、ウラマーとしても影響力の大きい人材がタンフィズィア長（議長）を担当した15年間に、シュリア長たる総裁の存在感はさらに薄れた。民主化以降は議長をはじめとする組織幹部が実践政治志向を強めてウマツトとの間に大きな懸隔をつくと同時に、総裁はそれをとどめることができなかった。活動路線と組織整備が問題になるなか、2010年全国大会の指導部選挙では、現職議長が現職総裁に挑戦するというかつてない事態が起きた。議長側はシュリア強化による組織運営を構想して選挙に臨んだが、自らの実践政治関与が瑕疵となって敗退した。総裁にはウラマーの学問やモラルの体現者としてシンボリックな存在としてウマツトをつなぐことが期待される一方、指導力はそれほど問われなかった。また、議長には組織運営能力を高めてウマツトの福利となるプログラムを実施することが期待されている。NU内では指導者個人のカリスマに頼らない指導体制へと移行すべきだという声が上がっているが、組織整備の見通しは立っていない。

はじめに

- I ヒッタ成文化の背景——二重指導体制の揺れ——
- II 組織改革をめぐる議論
- III 第32回全国大会とNUの「伝統」
むすび

はじめに

インドネシアのイスラーム団体、ナフダトゥル・ウラマー（Nahdlatul Ulama：ウラマー〈宗教

学者〉の覚醒、以下NU）は、1926年1月スラバヤで、イスラーム教育機関プサントレン（pesantren）を主宰するキヤイ（kyai）を中核メンバーとして結成された。ウラマーの人的関係を梃子に拡大し、独立後1952年には政党となった。しかし、1984年に組織の理念を「NUのヒッタ（khittah、戦術、闘争路線）」（I-1参照）として明文化し、宗教社会団体（jam'iyah diniyah）であることを宣言して現在に至って

る。結成以来継続して行われてきた活動は「法学検討 (Bahtsul Masa'il)」^(注1) くらいであり、ライバル団体のムハマディヤ (Muhammadiyah) に比べると組織的活動に乏しく、教育・社会分野ではかなりの後れを取っている。それにもかかわらず、現在NUの会員は約4000万人と推計されている^(注2)。また、ややデータが古いが、2001年に『テンポ』誌が行ったアンケートでは、全国のムスリムの約半数がNUに親近感を覚えると答えており、約2割のムハマディヤを大きく引き離している [Tempo 30 Des. 2001, 48-49]。インドネシアでのNUの存在感は大きく、その動向は社会全体にも影響を及ぼす^(注3)。

NUは、1970年代末までは内外の研究では等閑視されていた。保守的なウラマーから成り、政治的オポチュニストの集団とみられていた。しかし1980年代に入ると、新しい指導者アブドゥラフマン・ワヒド (Abdurrahman Wahid <1940~2009>、通称グス・ドゥル <Gus Dur>) の革新的なイスラーム思想がNUのイメージを変えた。同時に、開発／近代化の時代にも発展を続けるNUの潜在的可能性が改めて注目されるようになった。この30年間に海外の研究者がNUに関する研究を次々に発表すると同時に、NU内部からもNUを語る、あるいは解明しようとする文献が多く出版された。

なかでもNU理解を大きく進展させたのは、オランダの人類学者マルティン・ファン・ブライネッセンである [Bruinessen 1994]^(注4)。「伝統派」とされるウラマーの強みが古典文献に基づいたイスラーム法学思考にあることを押さえ、その法学思考に基づいてNUが直面する現実に柔軟に対応してきたこと、また、NU内部には常に異なる複数の見解があって一枚岩でないこ

とも明らかにした。特にグス・ドゥルを中心とする世代の活動に注目し、ヒッタを成文化してNUの実践政治からの切り離しを図り、組織改革を推進する様を描き出した。イスラーム思想展開のダイナミズムを強調し、改めてウラマーがムスリム社会における価値観形成の鍵を握ることを示した。また、NUが草の根に影響力を有するのは、個々のウラマーと一般信徒との日常的なつながりであることを指摘し、ムスリム社会の指導者としてのウラマー像を鮮明にした。

これに対して、アメリカの政治学者ロビン・ブッシュは、NUは結成時からムスリム社会の中での主導権を握ることを目的としていたとして、NUの政治志向性を強調した [Bush 2009]。ヒッタはグス・ドゥルにとっては政治的道具にすぎなかったと断じ、グス・ドゥルは宗教問題の中に政治を隠べいたとして、その政治的ジグザグを批判的に考察した^(注5)。対象とする時期がファン・ブライネッセンとは10年ほどずれており、激しい政治変動がNUを取り巻いていたことを考えると、同一人物の評価が思想と政治活動では異なった、とは言えない。しかし、改めて浮かび上がるのは、NUのあり方が指導者個人の資質に大きく左右されること、また、NUにとって政治と宗教を切り離すことの難しさである。

こう考えた場合に注目すべきなのが、5年に1度の全国大会 (Muktamar) において繰り返される、NU内の政治志向の強い勢力とそれに反発する勢力との衝突である。組織的活動が乏しいNUが組織体として抱える問題は、この全国大会で凝縮されて表出する。そこでは、全国の各支部代表が意見を表明して組織内の勢力図も明らかになるが、特に総裁 (Rais 'Aam) と議長

(Ketua Umum) の選出はNU成員の最大の関心事となる。NUは結成以来、政策決定者としてのシュリア (Syuriah, 宗教評議会) と組織運営の実務を担当するタンフィズィア (Tanfidziyah, 執行部) から構成される二重指導体制で運営されてきた。シュリア長たる総裁は最高指導者であり、碩学のウラマーが就任するのが常である。一方、タンフィズィア長たる議長は、やはりウラマーではあるが、高い実務能力が要求される。総裁と議長がどのようなペアになるかが、NUの進む方向を左右する。

全国大会では、従来は議長選をめぐって熾烈な競争がなされた。議長は組織運営の責任者として実務を通して影響力を拡大しやすだけでなく、外部との交渉の矢面に立つだけに政治との関わりが避けられない。よって、その政治的姿勢が常に問題にされた。一方、総裁は協議あるいは選挙でも出来レースのようなかたちで選出されてきた。総裁はNUの精神的指導者であり、内部抗争に染まらないでウラマーの権威が保てるように配慮されてきた。

しかし、筆者が見学した第32回NU全国大会(2010年3月23～27日、スラウェシ島マカッサル市で開催)では、総裁選で現職総裁に現職議長が挑むというかつてない事態に至った。1998年以降の民主化のなかで、NUを踏み台に政治に飛び込むNU関係者が相次いだことへの批判が高まると同時に、組織活性化には指導力のある総裁が必要だという認識も強まるなかで起きた「事件」であった。ヒッタ成文化以来、NUと政治との関わりがいくつにも解釈されてきたこと、また、何をもって「ウラマーが指導する団体」とするかをめぐらる問題に関して、四半世紀をかけてひとつの決着をつけることを迫られ

た。

第32回大会に関してはすでにファン・ブライネッセンが、総裁・議長選出をめぐる外部干渉、マネー・ポリティクスなどに切り込んだが、その関心は思想にあり、今回の結果でNUの保守化傾向に歯止めがかかると展望した[Bruinessen 2010]。本稿は、ファン・ブライネッセンが扱わなかった、組織のあり方、二重指導体制に関するNU内の議論に焦点を当てる。組織改革は30年来の課題であり、この問題は今回の総裁選をめぐる対立でもその背景にあり、NU内ではヒッタ解釈の問い直しが繰り返されていた。特に危機感が高まった民主化期における内部の議論を追うが、その際、今まで海外の研究者があまり関心を払わなかったグス・ドゥルに批判的な勢力の意見も含めて比較検討する。総裁選に至るまでの組織をめぐる議論の中に新しい時代の組織運営と活動路線、指導者のウラマーには何が求められているのかを探り、それを踏まえた上でこの大会の意義を考える^(注6)。

I ヒッタ成文化の背景 ——二重指導体制の揺れ——

1. 二重指導体制とヒッタ

まず、NUの組織のあり方を概観しておきたい。NUはマズハブ (madhab, スンニ派の正統四法学派) を堅持するウラマーの親交を目的に結成された^(注7)。当初NUの成員は宗教教師 (guru agama) / ウラマーとそれ以外に分かれていたが、この区別は遅くとも1970年代初期にはなくなっていた [PBNU 1972]。ウラマーには認定制度があるわけではないのでその定義はあいまいだが、NUでは、古典文献に精通して法学検討

などで議論をリードする力量と、プサントレンを主宰してサントリ (santri, 生徒) や周辺住民に尊敬されて「キヤイ」の尊称で呼ばれることが重要である。規約には特に成員に課せられる義務や会費に関する規定はなく、成員には先述の法学検討の決定に従うことも義務づけられていない。

現在でも、成員の二重構造はきわめて緩やかではあるが維持されている。非ウラマーの成員大衆はウマツト (ummat, 本来は「ムスリム共同体」の意) と呼ばれる。これは、プサントレンのキヤイとサントリ、およびキヤイの影響下にある周辺住民が巻き込まれるようにしてNUが成立していった経緯を反映している。NUはコミュニティ (komunitas, コミュニティ) とみられることが多く、成員はワルガ (warga) という「身内」につながる言葉で表される。これは、成員が人的関係で感情的につながれた集団としての性格が強いからであろう。地方にいる個々のキヤイの影響力を基盤にしているだけに、中央統制が難しい。成員は、日常的な宗教実践でNU独特の宗教慣行・儀礼に従うことでNU成員としてのアイデンティティを保っていると言える^(注8)。

成員は大雑把にしか把握されないが、全国の役員会は1970年代末には、国の行政機構に合致させて次のように整備されている。

中央役員会 (Pengurus Besar Nahdlatul Ulama: PBNU, ジャカルタ)

地方役員会 (Pengurus Wilayah: 州, 便宜上, 本稿では「州支部役員会」と呼ぶ)

支部役員会 (Pengurus Cabang: 県/市 (「県支部役員会」と呼ぶ))

副支部委員会 (Majelis Wakil Cabang: 郡)

村役員会 (Pengurus Ranting: 村) [PBNU n.d., 7-8]

中央から村まで、役員会はシュリア (宗教評議会) とタンフィズィア (執行部) から構成される。シュリアが政策協議・決定を行う指導部 (pimpinan) であり、タンフィズィアはその下の日常業務の執行体 (pelaksana) と位置づけられている^(注9)。この二重指導体制は、ウラマーが統率するが、実務家のサポートを受けて組織を運営するという結成時の事情に由来する。地方レベルのタンフィズィアとシュリアにはさほどの違いはないようであるが、別格の中央役員会ではこの区別はかなり意識される。

先述した通り、中央役員会のシュリア長は総裁、タンフィズィア長は議長であり、総裁が最高指導者である。初代の議長は全くの実務家であったが、第2代以降はキヤイと呼ばれるウラマーが就任し、第3代のマフッズ・シディック (Machoezh Siddiq (1907~44), 在任1937~42) の時期に職務が整備された。二重指導体制は成員の二重構造に対処するものでもあったが、総裁になるウラマーの学的権威とそれに裏づけられた指導力が前提であった。歴代の総裁や議長には東ジャワ出身者が多いが、発祥の地であるとともに有力プサントレンの多い東ジャワは、現在でもNUの最大の地盤である。

最高意思決定機関は全国大会であり、指導部選挙の投票権は、州代表 (utusan wilayah) と県代表 (utusan cabang) も同等にそれぞれ1票ずつ与えられている [PBNU n.d., 10-12]。選出された総裁と議長は、全国大会後に組織編成委員 (formatur) とともに、中央役員会の編成作業を行う。中央役員会の下には各専門部会があり、また、NU傘下には10の下部組織も個別に活動

を展開しているが、中央役員会の方針には従う。しかし、このような役員会、指導部の形態は徐々に整ったことを押さえておきたい。

初代総裁のハシム・アシュアリ (Hasjim Ash'ari <1871~1947>、在任 1926~47) は、植民地期ということもあって政治に関与しなかったが、NU創立や新生インドネシア共和国擁護のジハード (聖戦) というNUの命運を決するファトワ (法学裁定) を出した。独立後にNUが政党になったときにタンフィズィアは拡大したが [Muchith Muzadi 2006b, 108]、総裁になったワハブ・ハズブラ (Wahab Chasbullah <1888-1971>、在任 1947~71) とビスリ・シヤンスリ (Bisri Syansuri <1886~1980>、在任 1971~80) の個人的性向がNUの路線を左右した。ワハブはNU内の反対を押し切ってスカルノの「指導される民主主義」を支持したが、それに反対していたビスリはスハルト政府に対しても批判的な態度で臨んだ^(注10)。また、ビスリの総裁就任直後に、シュリアの優位がNUの規約に明記されたが [PBNU 1972]、ビスリは長年議長職にあるイドハム・ハリド (Idcham Chalid <1921~2011>、在任 1956~1981) が率いるタンフィズィアに不信感を抱いていたことが知られている [Choirul Anam 2010, 66]。イドハムはその時々の権力者に協調して、2つの政権下で閣僚にもなった老練な政治家であった。

一方、1960年前後からNU内では「ヒッタ」という言葉が、過度の政治関与に対する批判として聞かれるようになった^(注11)。第26回全国大会 (1979年6月) 直前に、かつて「指導される民主主義」に反対していたアフマド・シディック (Achmad Siddiq <1926~1991>、マフッズ・シディックの弟) は、NU結成当時のウラ

マーの共通認識を小冊子『覚醒者のヒッタ』 (Khitthah Nahdliyyah) に記した。ウラマーの規準は、信仰の他に、預言者の継承者として、その教え (学問)、行いおよびモラルが問われることを強調し、組織としてNUがなすべき役割は宣教、教育、社会福祉、経済活動であるとした。NUは当初の理念に基づいて、政党から宗教団体への回帰を完結させるべきだと主張した。

アフマドの提案がNU内で真剣に議論されるようになったのは、1980年4月、ビスリが没して、創設者世代の実力者ウラマーがいなくなるという事態が生じてからである。1981年9月に、学識は高いがカリスマ性に乏しいアリ・マクスム (Ali Maksum <1915~1989>、在任 1981~84) が総裁に選ばれると、シュリアとタンフィズィアとの確執が露わになった。NUが一党派となっている開発統一党 (Partai Persatuan Pembangunan) で、NU系議員が総選挙の比例代表名簿で不利な立場に置かれたのをきっかけに、1982年4月、総裁アリと長老アサド・シャムスル・アリフィン (Asa'd Syamsul Arifin, 1897~1990) などがイドハムに議長退陣を迫った。イドハムはいったんそれに従う意向を表明したが、すぐ撤回してシュリアを無視する姿勢を鮮明にした^(注12)。NUは2つの極に分裂する事態となった。また、当時のNUは開発統一党との関係以外にも、大きな問題に直面していた。政府がパンチャシラ (Pancasila, 建国五原則) をすべての団体の綱領に盛り込むことを要求しており、イスラームよりも国家への忠誠を示すことを迫られていた。政府に批判的な姿勢を示したNUを標的とする、イスラームの「脱政治化」政策の一環であった。

1983年5月、NUの宗教的性格を強調して、

非政治家タイプでない従来のウラマーの主導権を再確立しようとする長老キヤイト、成員の社会経済的必要に応えようとする青年活動家が組み、NUの活動および国家の中の宗教のあり方を検討する作業部会を編成した。NU結成時の理念を再確認するとともに、それまでの経験を盛り込んで、NUの理念・目標を「NUのヒッタ (Khitah NU, NUの指針・戦術、以下「ヒッタ」)^(注13)として成文化し、成員や組織の思考・態度・行動の指針とした。検討が重ねられて、第27回全国大会(1984年12月)でヒッタは採択された [Bruinessen 1994, 127-135; 1996; Muchith Muzadi 2006b, 43-47]。また、長老ウラマーの権威を示すかのように、アサアドを委員長とするウラマー・チームが、総裁(アフマド・シディック)と議長(グス・ドゥル)を、選挙ではなく指名によって選出した^(注14)。なお、アリ・マクスムは、存命中に自らその職を退いた最初の総裁となった。

ヒッタは、NUの宗教理解(法学、神学、神秘主義)を示した後、社会にあっては中庸・穏健・寛容・調和をモットーとすることを明言する。組織の目的には、「ウラマー間の交流促進」「学問・教育活動の向上」「布教、宗教・社会施設建設」「社会生活の向上」を挙げ、社会の指導者としてのウラマーとその影響下にある人々が一体となって社会変革を図ることを強調する。人々の公益(kemaslahatan)のための活動は信仰実践(amal ibadah)とされているが、NU成員大衆が発展から取り残された人々として強く認識されている。活動においてはそれぞれの分野に合った人材を配置することを謳っているが、ウラマーが組織を指導することが再確認されている。最後に、NUの組織体としての独立性を謳

い、成員は憲法に保証された政治的権利を遂行することを求めている^(注15)。

NUは、宗教社会団体としての性格を明言し、インドネシア共和国を国家の最終形態として認め、インドネシア社会におけるNUの役割を規定した。当時の政治的状況のなかでは、組織体としてNUを開発統一党から切り離すことが意図され、NUの役職者は政党組織の幹部になることが禁じられた。この「政治撤退」あるいは「政治的中立性」は、当時のスハルト政権にとっては好ましいことと考えられて、NUと政府の緊張は緩んだ。

このように、権威あるウラマーの指導力を前提として、NUの二重指導体制が成り立っていたが、その前提が崩れかけたためにヒッタが成文化された。これは、政府からの圧力に対処する方便ではなかった。成員の社会福祉に資することを組織の活動と規定してウラマーとウマットの関係を維持し、組織の命運を保とうとしたのである。しかし、社会が近代化して一般信徒の教育レベルが上がれば、ウラマーの権威の源である学識の価値は相対的に低くなる。しかも、複雑化する現代社会で、ウラマーには宗教以外の知識も要求されるようになった。権威あるウラマーが少なくなるのは、とどめのような時代の必然でもあった。

2. アブドウルラフマン・ワヒド指導下のNU (1984~1999)

新世代の執行部はNU改革に乗り出し、シンクタンクであるNU人材開発調査研究所(Lembaga Kajian dan Pengembangan Sumber Daya Manusia NU: Lakpesdam NU)を設立したり、低所得者にクレジットを提供する庶民金融を試みた

りした [Bruinessen 1994, 235-257]。このようなプロジェクトは議長であるグス・ドゥルのイニシアティブによるところが大きかった。初代総裁ハシム・アシュアリと第3代総裁ビスリ・シャンスリを祖父とするグス・ドゥルは、有力キヤイと親交を結びやすい立場にあるのに加えて、1970年代から開発NGOに携わってプサントレンを拠点とする農村開発に取り組み、NU外部の人々とも交流した。イスラーム関連以外の読書量も豊富で、新聞・雑誌のコラムニストとしても知られ、NUの枠を超えて広く社会に発信する力があり、多彩な活動を行った。何よりも、イスラーム法学古典文献を再解釈して革新的な言説を展開するというスタイルで、伝統派ウラマーとしての力量を発揮し、国際的知名度も獲得した。

また、ヒッタで意図されたウラマーが導く組織としての性格を明確にするために、シュリアが最高指導部であり、タンフィズィアはその監督下にあることを「再確立」することが目指された [Bruinessen 1994, 135]。ただし、これは総裁と議長の関係が良好なときのみ成り立った。グス・ドゥルは、型破りの言動・活動でしばしば物議を醸してアサアドと不和になり、第28回全国大会（1989年）では議長再選を阻まれそうになった [Bruinessen 1991; 1994, 181-206]。しかし、総裁アフマド・シディックとは連携がよく、NU内部でも改革派指導部への支持が強かったために、再選された。しかも、議長職名は第27回大会でKetua Umum（総議長）からKetua（議長）に格が落とされたのに、Ketua Umumに戻され、制度的にタンフィズィアは強化されたかたちとなった [Bush 2009, 83]^(注16)。

その後、アリ、アサアド、アフマド・シ

ディックといった改革を支持する実力者キヤイが次々と他界した。1991年に総裁執行職（総裁代行）に就いたアリ・ヤファイ（Ali Yafie, 1926～）は、もともとグス・ドゥルと志向性の異なる法学者だったが、グス・ドゥルと対立して職を辞任した^(注17)。1992年にその跡を継いだイリヤス・ルヒヤット（Ilyas Ruhayat, 1934～2007）は、穏健で地味なウラマーであり、影が薄かった。グス・ドゥルはNUでは突出した存在となっていたが、組織内からはグス・ドゥルに対して改革プログラム失敗の責任や組織運営のずさんさに対する批判の声が上がっていた。加えて、その頃グス・ドゥルが政府批判の姿勢を鮮明にしたために、政府とNUの関係は再び緊張した。

第29回全国大会（1994年12月）直前に、グス・ドゥルはタンフィズィアを廃止してシュリアの権威を高めることを提案したが、自らがシュリアに異動することを試みたと思われる。しかし、それが否決されると議長選への立候補を表明したが、その専横ぶりが批判された。大会では、イリヤスがNU内の対立を緩和すると期待されて総裁に選出された。しかし、議長選では、反グス・ドゥル陣営にスハルト側近からの猛烈な肩入れがなされた [Fealy 1996]。ジャワのキヤイたちの結束でかろうじてグス・ドゥルは再選されたが、組織内では改革に反対する勢力が勢いを取り戻しつつあった [Bruinessen 2011, 36-37]。

1998年5月のスハルト退陣後に言論・結社の自由が解禁されると、NU内にも政治熱が高まってヒッタ議論が再燃した。ヒッタは政治に関しては「組織的にどの政治組織や社会組織にも拘束されない」という曖昧な規定のために、NUと政治の関連についてはさまざまに解釈さ

れていたままであった^(注18)。結局、グス・ドゥルを主たる「結党宣言者 (deklarator)」として民族覚醒党 (Partai Kebangkitan Bangsa) が結成された。また、民族覚醒党のみならず他政党に参加して政治に飛び込むNU関係者が相次いだ。何よりもグス・ドゥル自身が1999年10月に大統領に就任して議長職を去った。

長老キヤイのムヒット・ムザディ (Muchith Muzadi <1925~>)、後述するハシム・ムザディ (Hasyim Muzadi) の兄) は、ヒッタ後の15年間で振り返り、「ヒッタとアブドゥルラフマン (グス・ドゥル) は、NUをダイナミックに展開させる大きな要素であった」[Muchith Muzadi 2006b, 94] と、グス・ドゥルをNU変革の原動力と評価している。確かに、その改革の多くは成功したとは言えないが、グス・ドゥルの多元主義や宗教的寛容を唱道する思想家／オピニオン・リーダーとしての役割は大きく^(注19)、1990年代初頭には「NU青年 (anak muda NU)」と呼ばれる一群の若手の台頭を促した [As'ad Said Ali 2008]。グス・ドゥルの庇護を受けた青年活動家は、NUとは別個にNGOを組織して、社会開発、社会変革プログラムに取り組んだり、イスラーム法学古典文献の批判的検討という思想改革の分野に足を踏み入れたりした。人権・民主主義・ジェンダー公正を論じ、リベラルな教義解釈が脚光を浴び、NUは進歩的なイスラーム知識人を生み出す団体として内外の注目を集めるようになった。

その反面、グス・ドゥルの組織運営はヒッタの方向には沿わなかった。シユリア復権はならなかったどころか、特に1990年代には総裁の存在感は希薄になり、グス・ドゥルはNUの一枚看板的存在であった。第28回大会での議長

職名変更や第29回大会直前のどたばた劇を考え合わせると、グス・ドゥルは二重指導体制を非効率と考えていたのではないかとも思われる。二重指導体制には総裁と議長の連携、また何よりもその職にふさわしい力量のあるウラマーが必要であった。

並外れて強い影響力をもつ指導者が議長職から退いたことは、NUの組織運営にとってはひとつの転機でもあった。

II 組織改革をめぐる議論

1. 民主化時代のNUと政治

新秩序期 (1966~98) は、政府がイスラームを政治に関わらせまいと「非政治化」を図ったり、逆に政権内にイスラーム勢力を取り込もうと懐柔政策を採ったりした。グス・ドゥル指導下のNUの政治的ジグザグは、この政府からの多大な圧力に対する対応であった。民主化後はこのような政府の「対イスラーム政策」は消滅し、外部からのプレッシャーは小さくなった。逆に、NU内部から実践政治志向が強まった。

NUと民族覚醒党は組織的に区別されたが、第30回全国大会 (1999年11月) では、NUと民族覚醒党との歴史的つながりを重視する中央役員会の公式声明が出され、NUの実践政治への関与は正当化された。これに対して、Lakpesdam NUやNGOに活動拠点をもつ若い世代の活動家は、大会会場近くで「全国大会対抗版 (muktamar tandingan)」とも呼ばれる会合を開き、そこではグス・ドゥルの大統領就任に対する困惑が渦巻いた [Bush 2009, 168-169]。指導部選挙では、イスラーム法学の泰斗サハル・マフッズ (Sahal Mahfudz, 1937~2014) が圧倒的な

支持を受けて総裁に選出され、議長選では東ジャワ州支部執行部議長として実務能力を示したハシム・ムザディ (Hasyim Muzadi, 1944～) が議長に選出された^(註20)。

一見するとこの2人は、相互補完的な総裁・議長デュエットであった。サハルは、伝統的プサントレンで教育を受けた法学専門家で、インドネシアでも屈指のウラマーに数えられ、海外の研究者からも高く評価されている。早くから開発NGOが主催する農村開発のパイロット・プロジェクトに協力し、NUの若手ウラマーが古典文献の批判的検討をする勉強会を指導したことで知られる^(註21)。主宰するプサントレンのあるパティ (Pati, 中部ジャワ) の村にすることが多く、政治とは距離を置いていた。ウマットに慕われる農村キヤイの典型とも言える。一方ハシムは、実践的語学力重視の「近代ポンドク・ゴントル (Pondok Moderen Gontor)」を卒業した後、プサントレンだけでなく国立イスラム学院マラン校で学び、NUの青年組織や学生組織で組織実務の経験を積んだ活動家であった。マランに近代的プサントレンを主宰するが、学問では特筆すべきものではなく、サハルのように法学検討議論をリードするようなタイプのウラマーではない。

15年ぶりに新しい議長として登場したハシムは、グス・ドゥルの路線を継承すると思われたが、2001年7月、グス・ドゥルが大統領を解任されてNU内でも影響力を落とすと、政治的野心を露わにし始めた。2004年の史上初の大統領直接選挙では現職大統領 (当時) メガワティ・スカルノプトリ (Megawati Sukarnoputri) と組んで副大統領候補になった。しかも、議長職を辞するのではなく「休職する」として、大

統領選敗退後に議長職に復帰した。同年12月の第31回全国大会前には、グス・ドゥルとハシムの対立が大きく報じられた [Tempo 5 Des. 2004, 44-45]。グス・ドゥルは場当たりに総裁選出馬を表明したが、現職のサハルに惨敗して影響力低下を印象づけるだけであった。一方、グス・ドゥルに傾倒して育った若手活動家のハシムに対する反発は激しかったが、大きな勢力とはならず、ハシムは余裕をもって再選された。ハシムはこの若手活動家を遠ざけてNUからの締め出しを図ったが、保守的な法学思考を堅持する東ジャワのキヤイたちも彼らを「リベラル派」^(註22)として攻撃した [Tempo 12 Des. 2004, 26-36; As'ad Said Ali 2008, 208-217]。

一方、ハシムはNUのマネージメントの革新を遂行した。議長に就任するとNUのウェブサイトを立て上げて広報活動を強化した。議長職にある間に新たに100以上の県支部設立を承認するとともに、海外支部 (Cabang Istimewa) を設立し、組織拡大を図った。また、精力的に地方支部を回って組織役員とのコミュニケーションを図った。このような活動が地方支部幹部とハシムとの関係を強めた。さらに、「平和のための世界宗教会議 (World Conference on Religions for Peace)」の議長となり、NUを中東イスラム世界にプロモートした。このように、ハシムは実務家としての組織運営能力を発揮した^(註23)。

結局、その後も国政選挙や地方首長選ではNU票頼りの立候補者が相次ぎ、なかにはNU関係者同士が対立候補となる場合もあった。その最たるものは、2008年に行われた東ジャワ州知事選挙であり、NUの有力者同士が対立候補となって激しく競い合った。ここでもハシムは一方の側に与し、結果的にNUの本拠地でNU内

に大きな亀裂をつくることになった^(注24)。また、2009年の大統領選挙では、現職大統領スロ・バンバン・ユドヨノ (Susilo Bambang Yudhoyono) 組に対抗するユスフ・カラ (Jusuf Kalla) 組に肩入れした。この間、ハシムの実践政治関与を諫めるサハルの発言は効力がなく、サハルは指導力に乏しい総裁として不満をもたれるようになった^(注25)。議長がすべてを仕切り、総裁はお飾りようになった。

このような状況にいち早く批判の声を上げたのは若手活動家であった。その言説では「組織的 NU (NU struktural)」「文化的NU (NU kultural) / 非組織的NU (NU non-struktural)」という2項分類で、NU内の分断が問題にされた^(注26)。前者は、NU組織に強く関与する成員である組織役員 (pengurus)、つまり各レベルの役員会委員を指し、後者はそうでない大衆成員 (ウマット) を指す。前者はジャミア (jami'iah, 組織) を構成し、後者はジャミアに対してジャマア (jamaah, 集団) とも呼ばれる。若手活動家だけでなく、先述のムヒットもこの「組織的NU」「文化的NU」という用語を用いて [Muchith Muzadi 2006a, 11; 2006b, 35] 組織問題を論じた。ムヒットは、ジャマアはNU系の宗教活動に参加するが、ジャミアはこの人々を統制できず、またジャマアは大会・会合や文書でしかジャミアの存在を見ることができない、どのようにしてこの2つのコミュニケーションをとるかが課題であると強調する [Muchith Muzadi 2006b, 115-116]。一方、成員の忠誠は組織ではなく、まだ個々人のキヤイに向けられていることも指摘している [Muchith Muzadi 2006a, 10; Ayu Sartoto 2008, 88]^(注27)。

結成以来NUの二重構造の構成要素はウラ

マーとウマットと考えられていたのが、組織役員とウマットと捉えられているのに注目したい。ウラマーとウマットは日常的な宗教行事等を通して信頼関係でつながっていくのに対し、組織役員と成員大衆をつなぐような体系的組織活動はNUにはきわめて少ない。組織役員の多くはやはりウラマー、キヤイと称される地域の宗教関係者であるが、ウラマーとしてよりも組織役員としてみられるようになったのはなぜなのか。次に、立場の異なる3つのグループ/個人の、組織としてのNUに関する見解、組織改革への提言のなかからその事情を探る。

2. 組織改革をめぐる議論

(1) ヒッタ救済委員会

役員会に席をもたない若手活動家は、「1926年 NU ヒッタ救済委員会 (Komite Penyelamat Khittah NU 1926)」を名乗って、2004年全国大会2カ月前にチルボンで「NU成員の大協議 (Musyawarah Besar Warga NU)」を開いた。5年前と同じくこれも「全国大会対抗版」であった。そのヒッタ救済委員会が集会の成果をまとめた記録『NUの不安に答える』(Menjawab Kegelisahan NU, 2004) から、その主張をみる。この記録には、農業・土地利用、労働、漁業、プサントレン・教育、女性運動、プサントレン文化芸術等に関するプログラムが議論された成果として報告されているが、組織運営問題に絞ると、主張は次の通りである。

NU結成時の目標と使命は、人々の信仰心を高めることと、その生活の福祉と平等性を高めることである [Komite Penyelamat 2004, 9]。現在NUでは「ジャミア (組織)」と「ジャマア (成員大衆)」の間ではコミュニケーションが行

き詰まっているが、今後数十年を見据えた「冷静で健全」かつ包括的な思考を提示したい。信仰だけでなく、実際に直面する問題においても、「ジャマアの必要を満たすことのできる ジャミアの形態」を考えなければならない [Komite Peneyelamat 2004, 5-6]。1955年総選挙の頃から84年のヒッタ形成までの時期、NUの崇高な目的は大きく歪曲された。その後、実践政治でNUを利用する動きは1999年、2004年の総選挙で頂点に達した [Komite Peneyelamat 2004, 7]。

今日NUの混乱を引き起こしたのは「エリート」(主に中央役員会や有力州支部の幹部を指す：筆者注)であり、NUの垂直構造が組織役員によって短期目的の政治に利用されやすいことにも原因がある。エリートには、組織をキャリア昇進の階段とみるのではなく、それぞれの専門分野でジャマアに奉仕する場と理解する発想の転換を求める [Komite Peneyelamat 2004, 63-64]。

このエリートを変えることがNU救済の最も重要な点であるとして、次のように具体的な提言を行っている。

組織面におけるヒッタを実行するためには、規約の改正とシュリア優越性の回復が必要である。タンフィズィアの選出は、シュリアの提案に基づき大会参加者が選ぶか、あるいは大会参加者の提案に基づきシュリアが選ぶ。また、総裁と議長には資格基準を定める。

シュリアに入るウラマー、総裁の資格は以下の通りである。

1. 義務だけでなく、スンナ(推奨されていること)を毅然と実行すること。
2. 清潔で質素な生活形態であること。
3. イスラーム学の蓄積に精通すること。
4. 指導にかかわる分野で、社会問題を鋭敏

に理解すること。

5. ウマットと民族に奉仕する高い問題意識をもつこと。

議長に必要な資格：上記に加えてマネジメント能力が必要とされる。さらに、次の条件を満たすことが必要である。

1. 中央役員会から村支部役員まで政党幹部あるいは政治職を兼ねないこと。
2. 権力のためにNUを政治化する、あるいは名を汚すというネガティブな経歴を有さないこと。
3. 政治契約として、NU運営幹部は、任期中は政治職の申し出を受け付けず、立候補をしたり出馬要請を受け入れたりしないこと [Komite Peneyelamat 2004, 66-69]。

議長に必要な資格としての、政治活動を制限する3つの条件は、明らかにハシムの行状を指している。この他シュリアとタンフィズィアの主導権争いについては、顧問会(注9を参照)から構成される倫理委員会を設けることを提唱している [Komite Peneyelamat 2004, 69]。一方、ウマットへの奉仕に関しては、プログラムがうまく実施されなかったのは、NU内の意思疎通不足、混乱したマネージメント、運営者のプロ意識欠如などを原因としてあげた [Komite Peneyelamat 2004, 69]。プログラムでウマットに奉仕せずに、逆に政治利用する組織幹部を厳しく批判した。

(2) マスダル・マスウディ

マスダル・マスウディ (Masdar Masudi, 1954～) は、ヒッタ成文化に関わったほかにも古典文献の批判的検討で知られるNUの論客で、若手ウラマーの中ではいち早く1989年から中央役員会に入った。第31回全国大会では議長選

でハシム・ムザディの対抗馬として善戦し、第32回全国大会でも議長候補に名乗りを上げた。その議長選に備えてNUの課題（実行すべきプログラム案）を小冊子『2026年NUの1世紀に備えて』（*Menyongsong Satu Abad NU 2026*）にまとめたが、その中で組織状況について次のように述べている。

NUの組織マネージメントはあきれるほど弱く [Masdar Farid Mas'udi. n.d., 23], 「80年経っても組織と呼ぶには程遠い」 [Masdar Farid Mas'udi. n.d., 20]。感情的につながれた共同体 (pagayuban) という性格が強く、指導力はカリスマ性と個人的権威に頼っている [Masdar Farid Mas'udi. n.d., 78]。また、「文化的NU」（ウマット）と「組織的NU」（指導者、組織役員）の距離はますます遠くなっている [Masdar Farid Mas'udi n.d., 25]。NUエリートが実践政治に拘泥したために、ウマットは反発し、2009年選挙では意識してエリートと反対の立場を取るに至った [Masdar Farid Mas'udi. n.d., 29]。これを正すためには、組織のいずれのレベルでも筆頭の役員が政治職の候補になることを禁じる明確な規定を確立させるしかない [Masdar Farid Mas'udi n.d., 31]。

政治とは目的を達成するための戦術であり、政治は大多数に公益 (kemaslahatan) をもたらすものでなければならない [Masdar Farid Mas'udi. n.d., 33-38]。貧者に関心を向けないことは宗教に背くことであり、宗教に対するのと同じように真剣な関心を経済プログラムに向けなければならない [Masdar Farid Mas'udi. n.d., 50]。しかるに、1999年以降のNUは政党と変わらず、この10年は「誤れるNUの時代」であり、金に心を奪われている [Masdar Farid Mas'udi. n.d., 53-56]。「ウラマーの任務はウマットを導き、保護し、

ウマットに奉仕すること」であり、NUが「ヒッタに戻ることはウマットに戻ることに」である [Masdar Farid Mas'udi. n.d., 58-59]。

アジェンダを実行するには、組織役員に3種類の人材が必要である。第1は、奉仕の精神をもった有能な専門家集団であり、（全国の：筆者注）役員会全体の70パーセントが望ましい。第2は、ジャミヤのモラルの高潔性と一体性の要石として、指導精神と人民保護の精神があるウラマー／キヤイである。この人材は不足しているので25パーセントもいれば幸いである。最後は、ジャミヤの精神的要石になる聖者級の学匠で、そのなすべきことはただただNUと民族のために祈ることである。指導者の0.01パーセントもいれば我々は平穏でいられる [Masdar Farid Mas'udi. n.d., 67-68]。タンフィズィアやシュリアという言葉では示されていないが、明らかにこの第1カテゴリーはタンフィズィアに必要とされる人材を指し、第2はシュリアに入るべき人材、第3が総裁のことを指している。タンフィズィアとシュリアでは期待される機能が異なり、役割がはっきりと区別されている。

また、ウラマーについては、「カリスマ性のある人物は少なくなっていくのであるから、……（NU会員は人物ではなく）機関（としてのNU）に忠誠を向けなければならない」 [Tempo 17 Jan. 2010, 37] とも述べている。ウラマーがかつての影響力を失っており、ウラマーとウマットの関係が崩れ始めているからこそ、組織整備が必要と考えている。

(3) 東ジャワ州支部

第32回全国大会で総裁候補としてハシムを推したNU東ジャワ州支部は、2010年7月に、全国大会前後の出来事に関する見解を小冊子

『干渉と傲慢に抵抗する——組織秩序を確立させる——』(Melawan Intervensi dan Arogansi: Menegakkan Tertib Organisasi, 執筆者名は「NU東ジャワ執筆チーム」〈Tim Penulis NU Jawa Timur〉)にまとめた。これは大会後に執筆されたものではあるが、組織編成問題に関する部分は大会前に構想されていたと考えられる^(注28)。組織役員の声として、この小冊子からもその主張を整理する。

NUの運営は、キヤイの指導に中心が置かれるプサントレンのようなスタイルから脱していない。組織的な決定ではなく、個人的決定に基礎を置いているが、これには近代的運営を目指す内部の者さえ嘆息する。今のNUに必要なのは、組織体として再編成すること、ヒッタ達成のためにシュリアを組織的に強化することである。総裁が優越したのはワハブ・ハズブラまでで、それ以降総裁は内部紛争を取めきれず、シュリアとタンフィズィアは競合するのみならず、タンフィズィアが優越している。NUを導くシュリアを強化するには集団指導体制が必要である。シュリアの役割を7つの宗教分野(信仰とタレカット〈tarekat, イスラーム神秘道〉、法、宣教、教育、社会福祉、政治、幹部養成と国際化)に分け、シュリア委員がそれを担当して総裁を補佐する。また、総裁には次の資質が必要である。

1. 上記の7つの分野すべてに学問的知見を有すること。
2. すべての委員をコーディネートし運営する能力。
3. イスラーム精神とNUの法精神が堅固で、極端な思想(リベラル、ワハビー〈「原理主義」を指す：筆者注〉、シーア派)に影響さ

れないこと。

4. NUを個人や集団の道具としないこと。
5. 崇高な資質をもち、権威があること [NU Jatim 2010, 10]。

このシュリア強化構想は、実はかつてグス・ドゥルがタンフィズィアを廃止してシュリアの権限を高めようとした提案とも発想が似ている。二重指導体制から生じる対立を、シュリアに権限を集中させる「一本化」で解消しようとする考えである。しかし、組織改編は具体的に示されているが、どのようなプログラムを実施したいのかという構想は示されていない。

一方、役員の実践政治関与に関しては、東ジャワ州支部もこれを積極的に容認してはいないようにみえる。総裁の資格の4. は明らかに実践政治関与を指しており、政治に関する説明は歯切れが悪い。NUの潜在的政治性が他者に利用されないように、政治的選択では会員には方向付けをしなければならないと主張する [NU Jatim 2010, 7]。しかし、「東ジャワのキヤイは、NUが総裁としてのハシムの手にあって、全国的にも国際的にも速やかに発展することを期待している。NUが再び政治に翻弄されるのを心配する必要はない」[NU Jatim 2010, 12] という件は、ハシムの力量を信頼する支持者の間でも、その実践政治関与はNUにとって望ましいことではなかったと認識されているとも受け取れる^(注29)。

3. 新時代のウラマー、ウマツト、組織役員

3者とも、NUに組織改革が必要であることでは一致しているが、構想は異なる。これはNUを構成するウラマー、ウマツト、組織役員に対する認識がずれているせいであろう。

「ヒッタ救済委員会」とマスダルは、組織は草の根の大衆に働きかけるプログラムの実行、つまりウマットへ奉仕すべきことを強調する。それは組織役員とウマットとの懸隔に危機感をもつからであり、ウマットがNUから離れずに帰属意識を強くするようなプログラムを提案している。しかし、東ジャワ州支部の小冊子には「ジャミニア（組織）」という言葉が繰り返されているが、「ジャマア」あるいは「ウマット」という言葉は全く出てこない。一般会員に対する関心が希薄で、プログラム案がないのもそのせいであろう。またマスダルは、時代はすでに変化して、ウマットは自律的に政治判断をするようになっていることを指摘した。これとは対照的に、東ジャワ州支部は、成員の政治選択においては方向付けをしようとしているが、一般成員を客体としか見ていない。ましてや、マスダルが強調したウマットの組織役員に対する反発は認識されていない。

ウラマーについては、マスダルと東ジャワ州支部は、影響力あるウラマーが少なくなっているという見方で一致している。東ジャワ州支部は、組織運営の技術を重視し、運営能力のある指導者の下での組織統制力の増強を考えている。一方マスダルは、シユリア復権には触れないどころか、総裁には清廉な学者が就任するだけで十分だとする。学的権威と指導力を兼ね備えるのは困難とみたのである。組織役員がそれぞれの役割を果たして、組織機能を高める必要性を強調した。それに比べると、シユリアの復権や総裁の指導を強く主張するヒッタ救済委員会の発想は、そこに集う活動家の組織経験不足を反映しているとも言える。

実力者ウラマーの減少、組織役員と非組織役

員の断絶、組織運営能力の低さ、ウマットへの奉仕プログラムの欠如という問題で、NUの土台であるウラマーとウマットのつながりは崩れ始めていた。組織立て直しに不可避の条件として、ヒッタ救済委員会とマスダルは組織幹部の実践政治への直接関与の禁止を要求したが、それは何よりもまず、ハシムを拒むことを意味していた。

Ⅲ 第32回全国大会とNUの「伝統」

1. 大会前夜

第32回全国大会の開催が発表された2009年中ごろから、次期の総裁・議長選出が俎上に上ってきた。ハシムは議長職から退くことを8月から表明していた[Tempo 21 Maret 2010, 40]。折しも2009年末にグス・ドゥルが他界したが、「NUは、ウマットに奉仕する考えのない人の干渉を取り除かねばならない」と「遺言」し、ヒッタへ戻るための「信託人」に5人の名前を挙げていたことが報じられた[Tempo 17 Jan. 2010, 36-37]。新しい指導者を待望する気運が高まり、議長選には次の7人が立候補を表明した。

- (1) サラフディン・ワヒド (Salahudin Wahid, 1942年生, バンドン工科大学卒)。グス・ドゥルの弟、ハシム・アシュアリの創設したプサントレン・トゥブ・イレンの主宰者、2004年大統領選挙で元国軍司令官ウィラント (Wiranto) と組んで副大統領候補となった。
- (2) スラマット・エフェンディ・ユスフ (Slamet Effendi Yusuf, 1948年生, 国立イスラーム学院卒)。ウラマー評議会宗教問題委員長, 元アンソル (Ansor, NU青年組織)

議長，元ゴルカル（Golkar）国会議員。

- (3) マスダル・マスウディ（1954年生，国立イスラーム学院他卒）。NU中央役員会タンフィズィア委員，プサントレン社会開発NGO代表，革新的法学者。
- (4) アフマド・バクジャ（Ahmad Bagdja，1943年生，国立イスラーム学院卒）。NU中央役員タンフィズィア委員で25年間事務局を担当。
- (5) サイド・アキル・シラジ（Said Aqil Siradji，1953年生，メッカ・ウナムルクラー大学博士）。プサントレン主宰者。NU中央役員会シュリア委員。1999年の議長選でハシムに敗れたが，2004年は立候補せず。
- (6) ウリル・アブシャル・アブダラ（Ulil Abshar-Abdalla，1967年生，アラビア語学院卒）。Freedom Institute（経済界のシンクタンク）元代表，リベラル・イスラーム・ネットワーク（Jaringan Islam Liberal）活動家。
- (7) アリ・マスハン・ムサ（Ali Maschan Moesa，1956年生，エルランガ大学博士）。プサントレン主宰者。民族覚醒党議員（*Risalah* [15, 1431(2010), 12-21] 他）。

メディアの寵児になっているウリルも参加したことから，候補者同士の公開討論会が行われるなど，議長選はにぎやかな話題となった。組織整備問題は，大会前に中央役員会が発行した雑誌に掲載された議長候補者7人のインタビューの中でも3人が触れていた。マスダルは「組織のカリスマ性の構築」，バクジャは「シュリア・タンフィズィア構造を強化」，スラムットが「近代組織運営」を公約に挙げた [*Risalah* 15, 1431(2010), 12-21]。本命視されたサラフディンとサイドは，大会直前に大統領と接見して政

府との近さを誇示し，特にサイドは大統領からの信頼を得ていることをアピールした [*Kompas* 21 Maret 2010]。このような行為には，1994年大会のように政府からの介入を招き入れるのかという懸念も聞かれた。

しかし，NU内に緊張をもたらしたのは総裁選の方であった。2010年初めにはハシムの総裁選出馬の可能性が報じられた [*Tempo* 17 Jan. 2010, 37]。ハシム自身は最後まで立候補を表明はしなかったが [*Duta Masyarakat* 25 Maret 2010]，いくつかのプサントレンでハシムに出馬要請をする会合が行われていた。ハシムは，新しい形態のシュリアを構想して規約改正案を携えて大会に臨むことになった。一方，サハルは，大会2週間前の3月7日に地元のパーティに支持者が集まった席で，要請があれば総裁に再就任するという事実上の「出馬」表明をした [*Tempo* 21 Maret 2010, 40-41]。

このパーティでの集会を組織したのは，東ジャワ州知事選挙でハシムに苦汁を味わわれたサイフラ・ユスフ（Saifullah Yusuf，注24を参照）であった [*Tempo* 21 Maret 2010, 41]。また，有力キヤイも数人が出席していたが，そのなかでも2004年大会以降ハシム批判を強めていたムストファ・ビスリ（Mustofa Bisri <1944～>，通称グス・ムス <Gus Mus>）^(注30)は注目された。メディアでの露出度の高いキヤイであり，グス・ドゥルとも親しかった。そのほか，ハシムの政治活動に批判的な活動家等が集まった。こうして，学識の高い長老ウラマーがないがしろにされるのを憤るキヤイ，ハシムに恨みを抱く政治家，NUを実践政治から切り離そうとする活動家の連合が成立した^(注31)。これに対して，ハシムは全国の州支部役員会を中心に支持固めをし，東

ジャワの有力キヤイたちの支持も取りつけた [Kabar 9 Maret 2010, edisi II]。

先述した通り、議長は選挙での選出が通常であるが、総裁選は選出の前にほぼ前交渉が成立し、対決戦にならないように配慮がなされていた。しかし、今回はそのような話し合いもなく、しかも現職議長が現職総裁に挑戦するといういまだかつてない事態に、全国大会直前にNU内では緊張が高まった。

2. 指導部選挙をめぐる攻防

(1) 「異例づくめ」の大会

NU全国大会がマカッサルで開催されるのは初めてで、ジャワ島外では4番目となる。大会委員会は、「ナフディリン (Nahdliyin, 覚醒者, NUの民というような意味) の尊厳あるインドネシアへの奉仕を高める」をスローガンに掲げたが、地理的にインドネシアの真中に位置する場所で、NUが国家統合に貢献する姿勢を見せる意味もあった。また、切迫した事情としては、スラウェシを代表する実業家であり前副大統領でもあるマカッサル出身のユスフ・カラの財政支援が大きかったからとみられる。ハシムにとっては、ユスフ・カラとの強い関係を示すことも有利であったろう。代表を送る地方の支部にとっては、マカッサルまでの旅費は大きな負担になったと思われる^(注32)。しかし、会場に入れる州支部と県支部の代表よりもはるかに多い一般参加者 (penggembira, 原意は「野次馬」「観客」) が全国から押し寄せ、関心の高さを示した。

会場のあるマカッサル市郊外のスディアン巡礼者研修所 (Asrama Haji Sudiang) 敷地内やそこに至るまでの道路脇には、議長候補者の宣伝横断幕が並び、地方首長選挙と変わらない様相を

呈した。このような過剰宣伝も今までになかったことであり、民主化の時代が反映されているとも言えるが、政治家と同じアピール手法には批判が相次いだ。また、会場敷地内では、役員会に属さない成員の手になるスローガンを掲げた横断幕も多く、「ヒッタへ戻れ、ウマットへ戻れ」「キヤイの声がNU成員の声」「プサントレンへ戻れ」「NUエリートをNU化せよ」^(注33)と、組織運営に対する批判が目立った。

3月23日にユドヨノ大統領を迎えて開会式が行われた。大統領はNUに対する期待を述べたが、この演説に対しては「大統領のNUへの介入だ」という声が上がった。「ウラマーの作法に反することなく」というような表現が暗にハシムを批判すると考えられた^(注34)。

大会行事は24日夜から本格化し、議長の職責報告が行われた。ハシムは、任期中の実績をアピールし、今後も「国際化 (go international)」「インドネシア的なイスラームのあり方 (Islam a la Indonesia)」を国際イスラーム社会へ広める事業等を継続したいと表明した。また、NUの財政に言及し、ジャカルタの中央役員会事務所の経費の大半がユスフ・カラからの寄付で賄われたと述べた^(注35)。従来は、この職責報告に対して各州支部代表の意見表明が行われた後に、報告の是非を問う採決が行われる。しかし今回は、ハシムの報告が終わるとすぐ拍手による承認が求められた。総裁が発言の機会を与えられなかったのも異例で、嫌気が差したのか、サハルが壇上から退席した [Gatra 7 April 2010, 92]。

25日午前中は、前日の責任報告に対する33の州支部代表の意見表明が行われた。責任演説がすでに承認されたということで、割り当てられた時間はそれぞれ5分と従来よりも短かった。

ほとんどが執行部を称賛し、なかにはハシムを総裁候補に推すことを表明する支部まであった。執行部に批判的意見を述べたのはジョクジャカルタ特別州支部だけであった^(註36)。ハシムは州支部の意見表明に自信を得たのか、質問に対して答えるなかで、政治関与について若い人々から批判されていることにも言及した。NUは政治からは離れられず、成員の願望が表明されるチャンネルがあることが重要であるとして、政治関与はNUの利益を守るためと述べた。会場内外に設置されたテレビでは、NU東ジャワ州支部所有の放送局TV9が大会の進行を実況中継し、全体会議がない時間帯にはハシムの業績を放映し続けた。

このように、大会は従来の議事進行形態を変更して、ハシムを総裁にゴールインさせるために準備されたかのようなペースで進行した。

(2) メディア戦における「伝統」言説

メディアを利用した宣伝戦も激しかった。大会直前の3月18日、全国紙『コンパス』(*Kompas*)に、NU系のNGO活動家による、NUのあり方についての論評が掲載された。総裁と議長の関係は、プサントレンのキヤイとルラ(*lurah*, ポンドク長。キヤイに信任された年長のサントリ)のようなものであり、総裁職は「奪い合われる (*diperebut*)」ものであってはならないと主張した[Rumadi 2010]。これで口火が切られたかのように、新聞紙上に多くの「意見表明」がなされた。開催地マカッサルで発行される日刊紙には、若手のNU関係者の論説が相次いで掲載された。開催前日まではまだ落ち着いた論調で、NUの宗教的アイデンティティについて論じ、NUが伝統派たりうるのは「過去の良いものを生かして新しいものを取り入れるか

らである」とか、「ヒッタ 1926 へ回帰を」「民衆経済の構築を」というようなNUの進むべき方向について提言がなされた。

ハシムに対する反対の声が最初に上がったのは、開会式前日のNU系タレカットの会合でのことだった。「ハシムは総裁にふさわしい段階に達していない」との発言が出たことが報道された [*Fajar* 23 Maret 2010]。長老の発言だっただけにハシムに対する直接の批判が解禁された感があり、以降選挙当日まで全国紙でも地方紙でもハシム批判が繰り返された。ここでは、ハシムと同様にNUを実践政治に引きこんだ「NU エリート」の責任を追及する論調も目立った [*Masdar Hilmy* 2010; *Abdus Sair* 2010]。

メディアが最も多く引用したのは、グス・ムスの発言であった。開会式直後に、総裁選を直接選挙でなく長老ウラマー／キヤイの協議に委ねよという発言は、多くの新聞で報じられた [*Kompas* 24 Maret 2010; *Fajar* 24 Maret 2010; *Tribun Timur* 24 Maret 2010]。グス・ムスは、「ハシムの挑戦は伝統を変えようとしている」 [*Fajar* 26 Maret 2010] と、ハシム側に対して警告を発し続けた。

メディアでの論評では、総裁選びに関する「伝統」が目立って喧伝された。総裁は通常終身制であるとか、現総裁が存命中である場合は他の者が立候補するのは避けるのが「伝統」である、という具合であった。これに対して、ハシム側もメディアのインタビューに答えるかたちで反撃した。サハルこそが、1999年大会で、当時総裁であったイリヤス・ルヒヤトが存命中にもかかわらず、総裁に選出されて就任したのであるから、その「伝統」を破った張本人であるとした [*Tribun Timur* 24 Maret 2010]。また、議

長候補者ではサラフディンが2度論説を掲載して、ハシムの政治的野心をとどめなかったサハルの指導力の欠如を暗に批判した [Fajar 22 Maret 2010; *Tribun Timur* 24 Maret 2010]。

場外戦も報じられた。グス・ムスを中心とする長老キヤイは、投票前日まで協議による総裁選出を試みた。26日昼過ぎ、南スラウェシ州の有力ウラマー、サヌチ・バチヨ (Sanuci Baco) 宅で話し合いの場を設けようとしたが、ハシム側は現れなかったために工作は失敗した [Kompas 27 Maret 2010; Fajar 27 Maret 2010]。しかし、27日朝のテレビ (SCTV) は「キヤイ・サハルが優勢」と報じ、また、議長選もサイドが優勢になったことが選挙当日新聞に報じられた [Duta Masyarakat 27 Maret 2010]。大きな逆転が生じていた。

(3) 指導部選挙

27日午前、規定通りに選挙で総裁と議長が選ばれることが大会委員会から発表された。投票は2段階で行われ、まず候補者を推薦し、そこで99票以上を獲得した候補者が本投票に進むことになる。投票資格を有する代表は504人であった^(註37)。

総裁選から行われたが、開票では会場内外が緊張感に包まれた。候補者推薦の段階でサハルとハシムは競り合い、やがて会場外にいる双方の支持者が1票獲得するごとに歓声を上げるようになった。サハルが過半数を超えたところで、ショラワト・バダル (Sholawat Badar)^(註38)が沸き起こり、続いてaklamasi (拍手による決議) を要求する大きな声があがった。結果は、サハルが270票、ハシムが178票を獲得して他者を大きく引き離れた。選挙管理委員長が改めて結果を読み上げ、「規定に従って、2名による第2段

階選挙へ進むか、あるいは話し合いにするか」と述べていたところに、ハシムのメモ書きが渡され、メッセージが読み上げられた。「私は総裁候補になる用意はありません」というハシムの意思が認められ、本投票は取りやめになってサハルの当選が確定した。

続いて議長選が行われた。第1段階では上位の2人、サイド・アキル・シラジ (178票) とスラムット・エフェンディ・ユスフ (158票) が規定をクリアした。第2段階では、サイド294票、スラムット201票で、サイドの当選が決まった。総裁選のような緊張感はなかったが、サイドの獲得票が過半数を超えたとき、興奮した支持者が会場内になだれ込み、大会委員長が「開票はまだ終わっていない」と絶叫する場面があった。開票終了後、2人はただちに記者会見に応じ、今後も協力し合うことを誓い合った。なお、サハルは閉会式でやっと姿を見せ、「法学検討に発展がなければ、NUは発展しない」とNUのウラマーらしい挨拶を述べた。

翌日の各新聞には指導部選挙の結果が大きく報じられたが、特に総裁選については、「伝統の勝利」「より年長の者、より学問蓄積がある者を優先する、これがNUの伝統だ」「民主主義はあったが伝統は守られた」「にぎやかな騒ぎはあったが伝統は確立された」「これがNUの伝統だ。これがaswaja (スンニ派の略語、NU関係者が好んで用いる言葉) の顔だ」「これがプサントレンとNUのモラルだ」 [Fajar 28 Maret 2010] という、NU関係者の結果を歓迎するコメントが掲載された。敗れたハシムについては、「ハシムはゼロからヒーローになった」 [Tribun Timur 28 Maret 2010] という好意的な記事が目立ったが、「ハシムが無謀に本選に進んだら袋

叩きにされていた」という冷めた見方も報じられた [Fajar 28 Maret 2010]。

先述した通り、総裁選では大きな逆転劇があった。何が土壇場でサハルを勝利させたかについて外部者は推測するしかないが、少なくとも県支部代表に対してかなりの説得工作が行われていたようである^(注39)。また、大会期間中も大統領側の干渉やそれに絡む「マネー・ポリテクス」については何度も報道され、この選挙結果は「政府が勝利させた」 [Tribun Timur 28 Maret 2010] とも報じられた^(注40)。

総裁選に関心が集中したために、あまり話題にされなかったが、議長選の結果も事前の予想とはだいぶ異なったものだった。最有力候補と報じられていたサラフディン (83 票) と、ハシムがパートナーと考えていたバクジャ (34 票) は本投票にも進めなかった。「リベラル派の首領」とされるウリルは立候補が阻まれるのではないかと懸念されたが、実際は何の支障もなく 22 票を獲得し、リベラル派に対する強い反発があるなかでも一定の支持があることを示した^(注41)。スラムットの大量得票も大きな驚きでみられたが、ゴルカル党がかなりの後押しをした結果であり、サイドの当選は「外部からの干渉に対するプサントレン世界の勝利」 [Bruinessen 2010] とも考えられた^(注42)。

3. 大会後の中央役員会編成

中央役員会は全国大会終了後 1 カ月以内に編成されることが規約で定められているが、その編成作業は、新たに選出された総裁と議長が全国大会終了時に選出された 5 人の編成委員に補佐されて行く。この編成委員は東ジャワ州支部代表などハシムの息がかかった人物が選ばれて

いた。ハシムが総裁選で潔く撤退したのは、中央役員会の編成にまだ一縷の望みを託していたからであろう。

編成会議は 4 月 12 日にサハルのいる村で開かれた。そこでの草案では、副総裁はハシムとグス・ムス、副議長はスラムット・エフェンディ・ユスフとアサアド・サイド・アリ (As'ad Said Ali)^(注43)、それぞれ 2 人の名が記された。副総裁・副議長はそれぞれ、総裁・議長に何かがあったらそれを代行する役目を負うし、次期総裁・議長の最右翼とみられる要職である。ところが、19 日に発表された中央役員会名簿は、12 日に合意された案とは異なっていた。副総裁はグス・ムス 1 人でハシムはシュリアの一委員にすぎず、副議長はアサアド 1 人でスラムットもタンフィズィアの一委員という扱いであった。発表後のインタビューでサイドは、パーティでの会合でサハルが、ハシムとは関わることができないという意向を示したこと、また、副議長はサハルの要請で指名されたことを語った [Tempo 9 Mei 2010, 142]。

この人事に対して、東ジャワ州支部は 4 月 21 日付で総裁および議長宛てに、中央役員会編成発表についての抗議文書を送った。またその後 7 月に、先述の小冊子に見解をまとめた。東ジャワ州支部は、今回の全国大会を NU の組織としての方向を定め、基本的な組織問題の解決を探る重要な契機と考えていたという。ハシム側が大会での出来事をどう受け止めたのかということを知る上では有用なので、ポイントを絞って紹介したい。主張は次の 4 点に絞られる。

- a. ハシム・ムザディを総裁候補に推した理由：シュリアの強化には、カリスマだけでなく、組織運営を知りタンフィズィアを理

解することが必要で、ハシムはそれを備えている。

- b. 指導部選挙には外部干渉があった：干渉は、だいぶ前からハシムを総裁候補にするのに反対するグループがいたので察することができた。NUの指導部を手に入れようとする勢力には、ハシム・グループ、チキアス (Cikias, 大統領：筆者注)・グループ、ゴルカル・グループ、独立グループの4つの陣営があった^(注44)。しかし、最終的には後3者は、サハルとサイドを勝利させるために合体した。ただし、議長選ではゴルカルはスラムット・エフェンディ・ユスフをゴールさせるために動いた。特に、収賄 (riswah) と投票前夜のゴタゴタで勢力図が変わった^(注45)。外部干渉によってNUは引き裂かれた^(注46)。

- c. (新しい) 中央役員会編成は全国大会の意思を反映していない：4月19日に発表された名簿は、12日の編成作業で合意されたものとは異なる。総裁と議長は、中央役員会編成においては全国大会の意思を尊重することを定めた組織規定に従うべきである。

- d. 中央役員会編成では、組織経験のある者が捨て去られた [NU Jatim 2010]。

ハシムが副総裁から外されたことを不当とすることに力点が置かれているが、大会に外部干渉と買収工作があったことを告発したのである^(注47)。しかし、新しい中央役員会がこの批判に関心を向けた様子はなく、ハシムの職位には変更はなかった。シュリアには「リベラル派」に近い委員もその席を保持したし、新しいタンフィズィアには、東ジャワ州支部が敵視してき

たNGO活動家の名前もある^(注48)。

新しく議長に選出されたサイドは、サハルやマスダルとともに、国際的評価の高いウラマーである。思想的許容度が大きいことでも知られており、早くから中央役員会のシュリアに入って組織経験は積んでいる。しかし、実務家タイプではないので、組織運営がそれほど改善されるとは期待できない。

4. 第32回大会の意義

マカッサルでの大会は、東ジャワ州支部が位置づけるように、NUの今後の方向を左右するものであり、ヒッタを採択した第27回大会 (1984年) に次ぐ重要な大会となった。しかし、第27回大会のように組織の指導層と非役員の長老キヤイが一体となって、外圧からNUを守るために改革の方向を決定したものではなかった。現職議長が現職総裁に挑むという、かつては考えられなかった事態に直面したために起きた。組織解体の危機感と、組織幹部に対する反発が原動力となって成し遂げられた軌道修正であった。

特に決着がつけられたのは、指導者の実践政治関与問題である。ハシム側は、組織役員を取り込んだと慢心していたために、自らの実践政治関与に対する不満が勢力図を変える可能性を読めなかった。ハシムの実践政治関与は所詮素人芸で、NUに利益をもたらさず、ハシムは個人的野心のためにNUを利用したと考えられていた [Bruinessen 2010]。さらに、組織運営能力という観点からだけ総裁職を考えたところにもハシム側の誤謬があり、総裁にはウラマーとしての力量と成員大衆に対する奉仕の精神が期待されていることに無頓着になっていた。サハル

が長年農村住民の問題と向き合うなかで法学思考の研鑽を積んで、尊敬を集めてきたことを顧みなかった。指導力は乏しくとも、サハルはウラマーのあるべき姿を、身をもって示していた。政治色に染まらない学識の高いウラマーを総裁に戴くことで、過度の政治関与を避けていることを組織の内外に示すこととなった。

今回の指導部選挙では、学的権威のあるウラマーが総裁および議長に選出されて、「ウラマーが指導する団体」としてのアイデンティティを確認した。しかし、総裁にはすでに指導力は期待されず、二重指導体制は実質を伴わない形式的なものへと変化していた。突出した影響力でNUを動かしたグス・ドゥル議長の15年、ハシムがサハルを無視した10年の間に、総裁職はすでに「名誉職」に等しいものへと変わっていた。総裁はシンボルとしての役割を担い、実質的にはほとんど議長が組織運営を掌握する。また、「シユリア復権」というフレーズは大会を通して会場でもメディアでも聞かれなかった。組織改革は総裁と議長の個人的資質にゆだねられる段階にとどまり、制度を再編する段階には至っていない。

む す び

インドネシア最大の宗教団体NUの二重指導体制は、総裁となるウラマーの学的権威と指導力を前提としていた。しかし、政治に深く関わって組織が膨張するなかで、政策決定者たるシユリアを上回って実務担当のタンフィズィアが組織を動かすようになっていた。1984年、NUは自らを政治組織と距離を置いた宗教社会団体として位置づけるために、その理念をヒッ

タに成文化して組織の方向転換と立て直しを図った。しかし、NUを取り巻く厳しい政治状況の中で、実質的な組織運営責任者である議長（タンフィズィア長）が大きな影響力を行使し、総裁の存在感は薄れた。しかも、民主化後にはNUを踏み台に政治的に飛躍しようとする指導者が相次ぎ、政治的野心をもつ議長が総裁をないがしろにする事態にまでなった。

第32回全国大会における指導部選挙では、ヒッタ成立から4半世紀間揺れ続けていた2つの問題、NUと実践政治との距離、また、ウラマーが指導する団体であることを示すことについて、ほぼ決着がついた。政治との関わりについては、組織幹部は政治とは適度の距離を保って、組織内の問題に専心すべきことが確認された。指導者が外部政治に関与することはNUに利益をもたらさないばかりか、ウマットの離反を引き起こしてNUを崩壊させるという危機感が勝った。NUを実践政治に利用させないためにも、総裁にはNUの学問を象徴する学匠のウラマーがその任に就くのがふさわしいことが確認された。総裁はシンボルとしての資格を備えていることが第一義であり、指導力は大きく問われなかった。二重指導体制は形式的に保たれたが、その実質は変化していた。

その一方、この大会では組織役員と一般会員とのギャップが露わになった。組織役員でない会員がメディアや横断幕を使って主張を掲げたのは、組織役員との間に意識に差がある上に、両者間にコミュニケーション回路がないことを示したもので、大会前に指摘されていた新たな「二重構造」が裏付けられた。ウラマーの影響力が衰え、組織役員に対して会員大衆が距離を置くのであれば、組織活動に多くの会員を巻き

込むことは容易ではない。組織再編の道はなお遠い。しかも、今回の軌道修正で役割を果たした若い世代は、都市部に拠点を置く活動家で、プサントレンの運営に従事した経験者は少なく、大半のNU成員との接触は農村部で地道に活動しているキヤイたちと連携するしかない。彼らが主張してきた成員大衆の生活を改善する社会経済部門での活動が活性化するためには、多くの困難があるように思われる。

(注1) 法学検討とは、宗教上の疑問、あるいは社会で実際に起きた問題に関して、イスラームの観点から解決法を示すために、文献精査・意見交換を行うことである。NUの法学検討については小林 [2008] を参照。

(注2) この数字はNUの公式サイトにも出てくる (NU Online (<http://www.nu.or.id>), 2011年5月23日アクセス)。現在NUおよびムハマディヤともに会員は登録されていない。

(注3) 2010年NU全国大会直前にコンパス紙が全国10都市でNUに関するアンケートの結果を公表した。それによると、NUが社会で果たす役割について満足するのは、「宗教間の寛容を守ること」(80.6パーセント)、「社会教育を推進すること」(61.7パーセント)、「民主主義を守ること」(60.8パーセント)であるという結果が出た [Kompas 15 Maret 2010]。

(注4) このファン・ブライネッセンの研究については小林 [1998] を参照。

(注5) オーストラリアのインドネシア研究者グレッグ・フィーリーも、NUの基調をなすのは「利益の安全を図る」プラグマティズムであり、ヒッタは形成時の政治的抑圧から逃れる戦略だったとみている [Fealy 2007, 163-164]。

(注6) 1979年に中村光男が外国人研究者として初めて第26回NU全国大会を見学して、闊達な議論を報告したのを皮切りに [Nakamura 1981], その後も海外の研究者が相次いで全国大会を見学した。中村は第27回大会 (1984年)

も見学し、NUは政党政治と決別して、ウラマーの指導で宗教社会活動へのコミットを再開するとみた [Nakamura 1996]。第28回大会 (1989年) を観察したファン・ブライネッセンは、NU内に政治を志向する勢力がまだ根強いことを指摘しつつも、「非政治化」政策は確立したと述べた [Bruinessen 1991]。ところが、第29回大会 (1994年) では、組織内の分裂がそれまでになく進み、改革の行方はおぼつかなくなるとみられた [Fealy 1996]。民主化のなかで行われた第30回大会 (1999年) については、見市 [2000] は、改革路線は継承される見通しであると述べた。しかし、その後に起きたのは、組織役員の過度の政治関与であり、改革路線は置き去りにされた。一つひとつの報告は、記録としての価値があるが、一話完結方式で叙述されたために、NUが長期に抱える問題に目を配らない傾向があった。第31回大会 (2004年) に関する報告は見当たらず、先述のプッシュが断片的に触れているだけである。

(注7) 結成時の規約は、第1条で協会 (perkoempoelan) の名称を定め、第2条で、その目的を、「4つのマズハブのいずれかを堅持し、イスラームの公益 (kemashlahatan) になることを遂行することである」と規定している。また、活動と会員資格に関しては、以下のように定めている。

第3条 協会の目的を達成するために以下のことを行う。

- a. マズハブに親しむウラマー間で連絡を取り合う。
- b. キターブ (kitab, 文献, 宗教書) は、それを教授する前に、スンニ派の手になるものか、あるいは逸脱者の手になるものなのかを調べる。
- c. 上述のマズハブのイスラーム教を良い方法で広める。
- d. イスラーム教に基づいたマドラサ (madrasah, 近代的イスラーム学校) を増やす。
- e. モスク, 礼拝所, ポンドク (pondok, プ

サントレンに同じ)に関連する問題に関心を向ける。孤児や困窮者に関しても同様である。

- f. イスラーム法で禁じられていない農業、商業、事業を推進する機関を設立する。

第4条 この協会の会員になることができるのは、第2条で述べたマズハブを有するイスラームを宗教とする者のみである。会員は以下のように分けられる。

- a. 宗教教師(ウラマー)会員
b. 宗教教師外の会員

会員になる権利を得るためには、本部に届けただけで足りる(後略)[Choirul Anam 1985, Lampiran 10-11]。

なお、スンニ派の正統四法学派とは、シャーフィイー学派、マーリキ学派、ハニーファ学派、ハンバル学派を指す。東南アジア一帯ではシャーフィイー学派が主流であり、NUのウラマーも主にシャーフィイー学派の文献を用いる。なお、ムハマディヤなどの「近代派/改革派」は、古典法学文献を使用せず、直接クルアーンとハディース(預言者伝承)を参照して個々のイスラーム法規定を導き出す。

(注8) NUがよく行うクヌット(kunut, 礼拝の後に唱える文句)、タルキン(talkin, 臨終者への信仰告白朗誦)、ショラワット(sholawat, アラビア語の祈祷文で節をつけて朗誦される)などは、ムハマディヤなどの「近代派/改革派」は行わない。また、NUは条件付きでタレカット(tarekat, イスラーム神秘主義教団)を認めているが、近代派/改革派はこれも認めない。

(注9) 1984年以降これにムスタシャル(mustasyar, 顧問会)が設置されたが、村には顧問会はない。ただし、中央役員会のムスタシャルでも、その動きはあまり伝わっていない。

(注10) ワハブはNUの実質的創設者であり、その法学思考は柔軟で、現実主義的に組織運営にあたった。政党への組織転換もワハブの強いイニシアティブで敢行された。これに対して、ビスリは法源学(イスラーム法学の方法論)の専門家で原則を貫くタイプであり、両者は対立

した。スカルノの失墜を機に、ワハブはNU内での影響力を失ったが、ビスリがワハブの存命中の総裁就任を固辞したために、ワハブは総裁職にとどまった。

(注11) 「ヒッタ」という言葉がいつから用いられたかについては諸説ある。ファン・ブライネッセンは、アフマドが最初に用いたとしている[Bruinessen 1994, 129]。長年NUの組織運営に関わったムヒット・ムザディ(Muchith Muzadi, 1925~)によると、ジャカルタでの全国大会(1960年)で最初に聞いたが、まだよく知られていなかったという(2011年3月5日、ジュンブル(Jember)でのインタビュー)。また、1959年[Bush 2009, 65]、あるいは62年[Ali Haidar 1994, 195]ともいわれる。いずれにしろ、NUがスカルノ政権に深く関わり始めた時期にすでに結成時の精神へ戻ろうとする動きがあったようで、NUと政治との関わりを考える上で興味深い。

(注12) 1973年にNUは開発統一党に併合させられて、集票マシンとしての役割を担った。しかし、開発統一党内ではNUは周縁化され、イドハムはその責任を問われていた。退陣を迫られたイドハムは、対抗措置として、中央役員会の文書は議長かその代理の署名がなければ認めないとする通達を出した[Muchith Muzadi 2006b, 108]。

(注13) ヒッタは、NU関係者にはよく“Khittah 1926”あるいは“Khittah 1926 NU”と呼ばれることが多いが、正式名称は“Khitthah NU”である。

(注14) 指導部選挙の方法は、毎回全国大会の最初で確認される。第27回大会では、新執行部は各地の代表による直接投票ではなく、長老ウラマーチームによって選出されることで合意がなされた。アサアド他5人がahlul halli wal aqdi(重要事項を決定する権限のある指導者協議会)となって、新執行部を指名した。アサアドは、ビスリ没後に総裁就任を辞退したという経緯があるが[Duta Masyarakat 28 Maret 2010]、それがかえってアサアドの立場を強めていたと言えよう。このような指導部選出方法は、独立後はこ

の大会だけである。また、必ずしも総裁と議長だけが選挙で選ばれるのではなく、副総裁、副議長が選挙で選ばれたときもあった。

(注15) 本稿では、Muchith Muzadi [2006a, 45-54] と Soeleiman Fadel dan Mohammad Subhan [2007, 61-69] に掲載されたヒッタを参照にした。

(注16) ムヒットもこの議長職名変更を強調した(2011年3月5日、ジュンブルでのインタビュー)。

(注17) アリ・ヤフィは伝統的法学理論を堅持し、官僚畑(司法, 教育)でキャリアを積み、政府系の団体ウラマー評議会(Majelis Ulama Indonesia)で議長を務めるなど、政府の開発政策に協力してきた。一方、グス・ドゥルは社会科学的思想も取り込んだ法解釈を容認した。幅広い人脈をもち、非政府系の活動家とも交流が深かった。

(注18) ヒッタ形成にも大きく関わったムヒットは、「ヒッタは、新秩序の政党制度の足かせからNUを解き放つこと、および、置き去りにされていたプログラムに着手する機会を得ることを目的としていたが、NU成員間では“新しい問題”ともなり、対立を引き起こした」[Muchith Muzadi 2006b, 94]と述べている。

Bush [2009, 79] は、ヒッタについて次の4つの解釈を挙げている。(1)政治からの完全な決別、(2)NU成員を開発統一党に投票する義務から解放する、(3)NUを組織的に開発統一党から切り離して、NUが政党をつくれるようにする、(4)NUを狭い意味での公的政治から切り離すが、広い意味での政治的活動、市民社会構築に積極的に関与する。

(注19) グス・ドゥルの思想については小林[2003]を参照。

(注20) サハルは1989年大会の副総裁選ですでに多くの得票を獲得し、次期総裁と考えられていた。しかし、1994年大会では、グス・ドゥルに近いサハルは、スハルトが出席する開会式からはグス・ドゥルとともに締め出された。総裁選の指名段階で次点になったサハルはすぐ辞退を申し出て、副総裁に就任した。当時は正副

総裁が議長候補に拒否権を行使できたが、サハルはイリヤスと組んでグス・ドゥルが議長候補者になるのを承認した[Fealy 1996]。また、ハシムは、少なくとも議長選出当時はグス・ドゥルの後押しを受けていた。

(注21) サハルのウラマーとしての業績については、Feener [2007] (特に167~172ページ)、小林[2007]を参照。

(注22) 「リベラル派」とは、2001年にジャカルタでNUやムハマディアの若い活動家が、高まる「原理主義」的な運動に対抗するために設立したリベラル・イスラーム・ネットワーク(Jaringan Islam Liberal: JIL)と同じ思想傾向にある知識人・活動家を指す。JILは、トークショー、ラジオ放送、出版活動を通じて教義の新解釈を唱道した。リベラル派は保守派のウラマーから激しい反発を買った。

(注23) ハシムのマネージメントについては、一定の評価はある。ハシムの業績について、長年中央役員会のタンフィズィア委員を務めたアフマド・バクジャ(Ahmad Bagdja, 第3節第1項参照)は次の5点を挙げた。(1)ジャワ島外の支部を活性化させた、(2)中央と州とのコミュニケーションを促進した、(3)多元主義や宗教間の関係を全国レベルで高めた、(4)国際レベルで宗教間の会合を促進した、(5)NUの海外支部を設立して、海外でNUを活性化した(2011年3月15日、ジャカルタでのインタビュー)。このうちマネージメント改善や穏健なイスラーム・イメージの促進、NUの国際化に関しては、ハシムに反対した側からも業績として認める声が聞かれた(NUジョクジャカルタ州支部事務局長ズフディムフドル(Zuhdi Muhdlor)とのインタビュー、2011年3月13日、ジョクジャカルタにて)。ただし、ハシムは社会的および宗教的にも保守的であるというのが、一般的な見方であろう[Bruinessen 2010]。

(注24) この選挙は決選投票までもつれ込んだ。ハシムが肩入れしたのはコフィファ・インダル・パラワンサ(Khofifah Indar Parawansa) = ムジオノ(Mujiono)組で、競い合ったのはスカルウォ

(Soekarwo) =サイフラ・ユスフ (Saifullah Yusuf) 組である。知事候補のコフィファは、NU女性組織ムスリマツトNU (Muslimat NU) の議長であり、民族覚醒党議員として女性エンパワメント大臣を務めたことがある。対抗馬の副知事候補サイフラ・ユスフもNU青年組織アンソル (Ansor) の議長であり (当時)、やはり閣僚経験があった。なお、2013年にもスカルウォ=サイフラ・ユスフ組は、コフィファ=ヘルマン・スナウィルジャ (Herman Soenawiredja) 組の挑戦を僅差で退けて再選された。

(注 25) サハルがハシムに対して強い姿勢で臨まないことや地方の支部を訪問しないことへの不満は、マカッサル大会でハシムを支持した側からも聞かれた (東ジャワ州ボンドウソン (Bondowoso) 県支部のシュリア長アリ・サラム (Ali Salam) とのインタビュー, 2011年3月6日, ボンドウォン; ズフディ・ムフドルとのインタビュー, 2011年3月13日, ジョクジャカルタ)

(注 26) 1990年代末のインドネシアでは、Islam kultural (文化的イスラーム) と Islam politik (政治的イスラーム) / Islam struktural (組織的イスラーム) という用語がイスラーム言説でよく使用された。前者は、国家の政策や制度を巻き込まずに、ムスリムは自発的にイスラームの教えを実践しようとする考えを表す。これと対照的に、後者は、政府の政策や制度を通してイスラームの進展を図ろうとする考え方を指す。NU kultural や NU struktural は、これを含意したものであろう。この用語に関しては Masykuri Abdillah [1999] を参照。

(注 27) ムヒットは、早くからNUの組織の未整備や組織運営能力のある人材不足を指摘してきたが [Moch. Eksan 2000, 115-116], 組織状況について次のように述べている。NUにはあまりに多い成員が集まっていることに加え、組織としての教育・経験が不足し、共同体 (paguyuban) の慣習がまかり通っており [Muchith Muzadi 2006b, 100], 全国大会では誰が何になるかに関心が集中し、信託するプログラムは何か、それはどのように運営されるのかには関心が向けら

れなかった [Muchith Muzadi 2006b, 84]。

(注 28) たとえば、シュリアに7人の専門家ウラマーを配置する構想は、大会前にもすでに報道されていた [Tempo 21 Maret 2010, 40-41]。なお、筆者はこの小冊子をムヒット・ムザディ氏から入手した。記して感謝したい。

(注 29) この点に関連して、ハシム陣営にいたバクジャも、ハシムが2004年に副統領候補になったことについて尋ねると、「禁じられていない」とだけ答えた (2011年3月15日, ジャカルタでのインタビュー)。

(注 30) ルンバン (Rembang, 東部ジャワ) 生まれで、父親もNUの有力キヤイであった。ルンバンでプサントレンを主宰しているが、法学専門家である一方、詩や小説、絵画創作などの活動でも知られる「異能のキヤイ」である。グス・ドゥルは生前グス・ムスに総裁への就任を要請していたと伝えられる。先述のグス・ドゥルの「信託人」5人の筆頭はこのグス・ムスで、あとはトルハー・ハッサン (Tholhah Hasan, 元教育大臣), マスダル, サイド, ウリルである。なお、ウリルはグス・ムスの女婿でもある。

(注 31) ジョクジャカルタのNU系NGOの代表であるイマム・アズイズ (Imam Aziz) も、この集会に参加した。イマムはサハルの元サントリであるが、チルボンでの会議をコーディネートした後、サハルから敵視されたという。しかし、2010年の全国大会ではイマムはサハルに付き添ってスポークスマンを務めた (2011年3月13日, ジョクジャカルタでのインタビュー)。政治に対する姿勢や学問の志向性からすれば、この3者の連合は奇天烈ではある。この種の離合集散については、1980年代初頭のNUの内部対立を考察した Jones [1984] の研究が示唆に富む。

(注 32) マカッサルまでの交通費は、プパティ (県知事) に要請、自力で調達と、支部によって異なるが、マナー・ポリティクスが入り込む余地をつくった。

(注 33) 大会委員会が設置した横断幕については、ジャカルタのNU中央役員会事務所の図書館で確認した (2010年8月10日)。ここに挙げ

たのはそれ以外の横断幕のスローガン。

(注34) 大統領がハシムの政治活動に言及したという論調で報じたのは、*Fajar* [24 Maret 2010], *Tribun Timur* [24 Maret 2010], *Duta Masyarakat* [25 Maret 2010], *Ujung Pandang Express* [26 Maret 2010]。ハシムは2度の大統領選挙で、ユドヨノ陣営に対抗する側に身を置いており、大統領がハシムに不信感をもっていたことは容易に想像できる。しかし、大統領は直接の批判はしなかった。

(注35) ハシムは口頭で、ユスフ・カラが毎月1億ルピア(約100万円)の事務所経費を寄付していると述べた。なお、NUの財政収支については簡単な報告が資料として参加者に配布された。組織体として経常的な収入はNUのワクフ等などの資産からの収益だけであること、5年間の収入400億ルピア(約4億円)のうち、77パーセントにあたる300億ルピア(約3億円)が寄付金で賄われていることが明らかにされた。なお、今回の全国大会開催費用はおよそ70億ルピア(約7000万円)とみられている。南スラウェシ州政府は5億ルピア(約500万円)を寄付した [*Fajar* 22 Maret 2010]。残りの大半は私的な寄付であるが、ユスフ・カラ個人の寄付が多くを占め、他に華人系タバコ企業などからの企業献金もあったとみられる。

(注36) ジョクジャカルタには、先述のイマム・アズィズ(注31参照)などグス・ドゥルに傾倒し、社会変革を目指すNGOに関わるNU系活動家が多い。

(注37) 大会初日に、投票権を有する支部の総数は544と発表されたが、実際の投票数は504であった。州支部は33で、すべて代表を送ってきた。県支部は485あるが、本部役員会によって認められているのは462であり、うち457が代表を送ってきた。さらに、海外支部は26認められているが、14の支部代表が参加した。

(注38) 預言者とバドルの戦いで倒れた預言者の教友を讃える内容の、韻文形態のアラビア語による祈祷。NUでは「勝利」の歓喜を表現するものとして朗唱される。

(注39) 3月25日、州代表の意見表明が終了した後、筆者は会場の外でサハルの「サクセス・チーム」にいるNU若手活動家と話をしたが、会場敷地内の宿舎では態度を鮮明にしていない県支部に対する働きかけが行われていることを聞いた。ファン・プライネッセンは、情勢は5日間の大会中、しかも投票前の数時間で変化したとみている [Bruinessen 2010]。

(注40) マネー・ポリティクスを報じた新聞は、*Duta Masyarakat* [22 Maret 2010], *Fajar* [25 Maret 2010], *Tribun Timur* [25 Maret 2010], *Ujung Pandang Express* [26 Maret 2010]。NU幹部役員が宿泊するマカッサル市内のホテルでは、ヌスロン・ワヒド(Nusron Wahid, アンソル活動家, ゴルカル議員)が現金入りの封筒を関係者に手渡すのが目撃されたという [NU Jatim 2010, 24]。また、国家官房長官スディ・シラライ(Sudi Silalahi)が会場付近で頻繁に目撃され、大統領側の干渉の証拠とされた。地方紙でも、スディ・シラライはハシムに投票しないように支部役員を集めて語ったことが報じられた [*Fajar* 25 Maret, 2010]。憲法裁判所長官(当時)マフムドMD(Mahmud MD)も、「大臣のなかには電話で影響力を及ぼしている者がいると聞いた」と述べている [*Fajar* 24 Maret 2010]。

(注41) 大会初日(3月23日)夜、大会運営規則(Tata Teritb)を定める会議で、総裁と議長候補者資格について、第22条第3項に、候補者は政党の役員でないことと同時に「イスラーム・リベラル・ネットワーク」の役員でないことという条件が加えられた。これは東ジャワ州支部の提案であった [NU Jatim 2010, 33]。なお、ウリルは、この大会後、政府与党の民主主義者党(Partai Demokrat)の幹部になった。

(注42) スラマツトには、旧アンソル議長としての人脈に加え、ゴルカル政治家としてのキャリアも有利に働いた。スラマツトに関しては増原 [2010, 149-150] を参照。一方、サイドにもマネー・ポリティクスの疑いがあるという [NU Jatim 2010, 49]。

(注43) 1949年クドゥス(Kudus, 中部ジャワ)

生まれ。プサントレンの家庭に育ち、ガジャマダ大学、アラビア語学院で学ぶ。国家情報庁(Badan Inteligens Negara: BIN)に勤務し、中東などの海外駐在経験が豊富であった。副議長に指名されたときには、引退間際とはいえまだBINの副長官であったために、物議を醸した。グス・ドゥルの薫陶を受けた若い世代の台頭について興味深い著作があり [Asa'ad Said Ali 2008]、本稿でも数度引用した。

(注44) チキアスとは、ボゴールにある大統領の私邸の所在地のことである。「独立グループ」とは、先述のパーティの会合で終結したグループのことを指すと考えられる。

(注45) 3月26日午前、投票は予定を早めて26日夜行われるとアナウンスされたが、27日未明になって翌朝に変更されるという混乱があった。この混乱は意図的なものであったことを示唆している。注39で述べた通り、ファン・ブライネッセンも同様にみている。

(注46) 外部勢力を引き入れたとされたのは、サイフラ・ユスフとグス・ムスであった。3月7日のパーティの会合を発案したサイフラは、サイドの有力な支持者でもあった [NU Jatim 2010, 20]。この会合ではサイフラに信頼されたアンソル関係者が集まったキヤイに「お車代 (uang transportasi)」を渡したという [NU Jatim 2010, 26-27]。

(注47) しかし、ハシム側からも、州支部役員は小巡礼への誘いがあったこと、また、マカッサルへの飛行機代も双方から申し出があったことが、NU関係者から聞かれた。このような収賄工作がどこまで投票に影響したかは不明である。また、先述のボンドウォソ県支部のアリ・サラムは、サハルに投票したと述べており (2011年3月6日、ボンドウォソでのインタビュー)、東ジャワ州でも州支部の意向を受け入れずに独自に投票した県支部があったことを示した。

(注48) シュリアとタンフィズィアの委員の構成人数は一定していない。今回の名簿では、シュリアは総裁、副総裁のほかにも14人の委員 (rais) があり、その中で「リベラル派」に近い

のは、マスダルとモハマッド・マハスィン (Mohammad Machasin) の2人である。また、タンフィズィアは議長、副議長のほかにやはり14人の委員 (ketua) があり、イマム・アジズ (注31参照) の名は特筆される。また、その書記局にはやはりリベラル派系であるイマドゥディン・ラフマット (Imadudin Rahmat, 元Lakpesdam研究員) が入っている [PBNU 2010, 144-146]。

文献リスト

〈日本語文献〉

小林寧子 1998. 「インドネシア新秩序体制下のナフダトゥル・ウラマー」『アジア経済』39 (10): 89-99.

—— 2003. 「インドネシアのイスラーム伝統派の思想革新——アブドゥルラフマン・ワヒドの思想形成の軌跡——」小松久男・小杉泰編『イスラーム地域研究叢書2 現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会.

—— 2007. 「インドネシアにおけるイスラーム法学理論革新の試み——イスラーム法集成 (KHI) 対案を中心に——」『アジア経済』48 (10): 25-55.

—— 2008. 「暮らしの中のイスラーム法——ナフダトゥル・ウラマーの法学決定集から——」『インドネシア 展開するイスラーム』名古屋大学出版会.

増原綾子 2010. 『スハルト体制のインドネシア——個人支配の変容と一九九八年政変——』東京大学出版会.

見市建 2000. 「ポスト・アブドゥルラフマン・ワヒド時代への継続と変化——第30回ナフダトゥル・ウラマー全国大会 (東ジャワ・クディリ) より——」『アジア経済』41 (5): 85-93.

〈外国語文献〉

Abdus Sair 2010. “Meng-NU-kan Elite NU.” [NUエリートをNU化する]. *Fajar*, 27 Maret.

Ali Haidar 1994. *Nahdlatul Ulama dan Islam di Indonesia: Pendekatan Fikih dalam Politik* [イン

- ドネシアにおけるNUとイスラーム：政治におけるイスラーム法学的アプローチ]. Jakarta: Gramedia Pustaka Umtam.
- As'ad Said Ali 2008. *Pergolakan di Jantung Tradisi: NU yang Saya Amati* [伝統の心臓部での格闘：私が見たNU]. Jakarta: LP3ES.
- Ayu Sutardo 2008. *Menjadi NU Menjadi Indonesia: Pemikiran K.H. Abdul Muchit Muzadi* [NUになることはインドネシアになること：アブドゥル・ムヒット・ムザディの思想]. Surabaya: Khalista.
- Bruinessen, Martin van 1991. "The 28th Congress of the Nahdlatul Ulama: Power Struggle and Social Concerns". *Archipel* 41: 185-200.
- 1994. *NU: Tradisi, Relasi –relasi Kuasa, Pencarian Wacana Baruka* [NU：伝統、権力関係、新しい言説の模索]. Yogyakarta: LKiS.
- 1996. "Traditions for the Future: The Reconstruction of Traditionalist Discourse within NU." in *Nahdlatul Ulama, Traditional Islam and Modernity in Indonesia*. eds. Greg Barton and Greg Fealy. Clayton: Monash Asia Institute.
- 2010. "New Leadership, New Policies? The Nahdlatul Ulama congress in Makassar." *Inside Indonesia* 101 (July-September 1010). <http://www.insideindonesia.org/> (2010年8月1日アクセス).
- 2011. *What Happened to the Smiling Face of Indonesian Islam?: Muslim Intellectualism and the Conservative Turn in Post-Suharto Indonesia*. RSIS Working Paper No.222, Singapore: S. Rajaratnam School of International Studies (<http://www.let.uu.nl/~martin.vanbruinessen/personal/publications/>より2012年1月10日ダウンロード).
- Bush, Robin 2009. *Nahdlatul Ulama and the Struggle for Power within Islam and Politics in Indonesia*. Singapore: ISEAS.
- Choirul Anam 1985. *Pertumbuhan dan Perkembangan Nahdlatul Ulama* [NUの設立と発展]. Surakarta: Jatayu Sala.
- 2010. *Koflik Elit PBNU Seputar Mukhtamar* [全国大会をめぐるNU中央役員会エリート抗争]. Jakarta: Duta Aksara Mulia Jakarta (1996年初版).
- Fealy, Greg 1996. "The 1994 NU Congress and Aftermath Abdurrahman Wahid, *Sukses* and the Battle for Control of NU." in *Nahdlatul Ulama, Traditional Islam and Modernity in Indonesia*. eds. Greg Barton and Greg Fealy. Clayton: Monash Asia Institute.
- 2007. "The Political Contingency of Reform-Mindedness in Indonesia's Nahdlatul Ulama: Interest Politics and the Khittah." in *Islamic Legitimacy in a Plural Asia*. eds. Anthony Reid and Michael Gilsenan. Oxon: Routledge.
- Feener, R. Micheal 2007. *Muslim Legal Thought in Modern Indonesia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Feillard, Andree 1999. *NU vis-à-vis Negara: Pencarian Isi, Bentuk dan Makna* [NU対国家：内容、形態、意義の模索]. Yogyakarta: LKiS.
- Jones, Sidney 1984. "The Contraction and Expansion of the 'Umat' and the Role of the Nahdlatul Ulama in Indonesia." *Indonesia* (38): 1-20.
- Komite Peneyelamat Khittah NU 1926 (Komite Peneyelamat) [1926年NUヒッタ救済委員会] 2004. *Menjawab Kegelisahan NU: Hasil-hasil Musyawarah Warga Nahdlatul Ulama di Pondok Pesantren Babakan Ciwaringin Cirebon 8-10 Oktober 2004* [NUの不安に答える：2004年10月8-10日チルボン・チワリンギン・ババカン・ポンドク・プサントレンにおけるNU成員協議成果].
- Masdar Farid Mas'udi n.d. *Menyongsong Satu Abad NU 2026* [2026年NUの1世紀に備えて].
- Masdar Hilmy 2010. "Reformasi Teologi Politik NU." [NUの政治神学の改革]. *Kompas*, 24 Maret.
- Masykuri Abdillah 1999. "Islam Politik dan Islam Struktural." in *Mengapa Partai Islam Kalah* [なぜイスラーム政党は敗退したのか]. eds. Deliar Noer et al. Jakarta: Alfabet.
- Moch. Eksan 2000. *Kiai Kelana: Biografi K.H. Muchith*

Muzadi [放浪キヤイ：ムヒット・ムザディ伝]. Yogyakarta: LKiS.

Muchith Muzadi, Abdul. 2006a. *Mengenal Nahdlatul Ulama* [NUを知る]. Khalista: Surabaya.

——— 2006b. *NU dalam Perspektif Sejarah dan Ajaran (Refleksi 65 Th. Ikut NU)* [歴史と教義の観点からのNU (NU参加65年を回顧)]. Surabaya: Khalista.

Nakamura, Mitsuo 1981. “The Radical Traditionalism of the Nahdlatul Ulama in Indonesia: a Personal Account of the 26th National Congress, June 1979.” 『東南アジア研究』 19 (2): 187-204.

——— 1996. “NU’s Leadership Crisis and Search for Identity in the Early 1980s: From the 1979 Semarang Congress to the 1984.” in *Nahdlatul Ulama, Traditional Islam and Modernity in Indonesia*. eds. Greg Barton and Greg Fealy. Clayton: Monash Asia Institute.

Pengurus Besar Nahdlatul Ulama (PBNU) 1972. *Keputusan2 Muktamar Partai N.U. ke XXV di Surabaya* [スラバヤ第25回NU党全国大会決定].

——— n.d. *Anggaran Dasar dan Anggaran Rumah Tangga Nahdlatul Ulama: Keputusan Muktamar NU ke XXVI di Semarang* [NU綱領及び規約：第26回スマラン全国大会決定].

——— 2010. *Hasil-Hasil Muktamar XXXII Nahdlatul Ulama* [第32回NU全国大会成果]. Jakarta: Sekretariat Jenderal PBNU.

Rumadi 2010. “Menjaga Kehormatan NU.” [NUの尊厳を守る]. *Kompas*, 18 Maret.

Soeleiman Fadel, H. dan Mohammad Subhan, S.Sos. 2007. *Antologi NU: Sejarah-Istilah-Amaliah-Uswah* [NU選集：歴史，用語，善行，範例]. Surabaya: Khalista.

Tim Penulis NU Jawa Timur (NU Jatim) [東ジャワ州NU執筆チーム] 2010. *Melawan Intervensi dan Arogansi: Menegakkan Tertib Organisasi* [干渉と傲慢に抵抗する：組織秩序を確立させる]. Surabaya.

〈新聞・雑誌〉
Duta Masyarakat.
Fajar.
Gatra.
Kabar 9.
Kompas.
Risalah.
Tempo.
Tribun Timur.
Ujung Pandang Express.

〈インターネット〉

Online Tempo (<http://www.tempo.co/>).

NU Online (<http://www.nu.or.id/>).

Presiden Republik Indonesia-Dr. H. Susilo Bambang Yudhoyono (<http://www.presidensby.info./index.php/pidato/2010/03/23/1364.html> 2010年3月23日大統領演説).

《追記》マカッサル大会以降，予想された通り，新議長サイドの下での組織整備は進まなかった。総裁に再選されたサハルは老齢もあってほとんどパティにいたまま，2014年1月に他界した。3月には副総裁のグス・ムスが総裁執行職に就任し，次の全国大会まで総裁職を代行することになった。折しもインドネシアは5年に1度の政治の季節を迎え，4月に総選挙，7月に大統領選挙が行われた。政党人や大統領候補者は今回もNU有力者の支持を得ようと働きかけた。NUは組織として中立的な立場をとると声明していたにもかかわらず，サイドは，民族覚醒党のTV宣伝の中に登場して，党勢拡大に一役買った [*Tempo* 20 April 2014, 54]。グス・ムスは，「議長はナイーブで政治的に利用された」と述べ，組織（ジャミニア）をつくることができないとサイドを批判した^(注1)。また，大統領選がジャカルタ州知事のジョコ・ウィドド (Joko Widodo) と元国軍エリートのプラボウォ・スビアント (Prabowo Subianto) の一騎打ちになることがわかると，サイドは個人的にプラボウォを支持することを表明した。「NU会員は自由に投票できる」とも述べたが，中立を侵したとしてサイドはNU内で批判された。

(注1) “Gus Mus: Ketua PBNU Tak Ngeti Politik”
(グス・ムス：NU議長は政治を理解していない)
Tempo.co 17 April 2014 (<http://www.tempo.co/>
2014年7月13日閲覧)。
(2014年8月18日記)

(南山大学外国語学部教授，2012年1月19日受領，
2014年3月24日レフェリーの審査を経て掲載決
定)